

市場から世界をみれば

ISG 情報システム株式会社 大谷淳一



を寡占している状態。この安全審査の手続きを経たGM食品および添加物の一覧が公開されている。10年5月12日時点で食品116品種（ジャガイモ8品種、大豆6品種、砂糖ダイコン（てん菜）3品種、とうもろこし61品種、ナタネ15品種、綿実20品種、アルファルファ3品種）、添加物14品目である。

また、審査継続中のGM食品および添加物は、同年4月15日時点で、パパイヤ、とうもろこし、大豆など13品種、添加物2

は、モンサント社（アメリカ）、デュポン社（同）、シンジェンタ社（スイス）、リマグレン社（フランス）などであり、現在では前3社で種苗業界の世界シェアの40%を占める状態となっている。また、00年におけるGM作物の特許技術に関する

シエアは、アブラナ（ナタネ）を例にとると、モンサント25%、カーギル13%、デュポン12%と、4社で5割を有する。小麦はデュポン41%、モンサント27%と、2社で約7割。大豆はデュポン48%、モンサント28%で、2社で8割弱。ジャガイモはノボザイム1社で72%。トウモロコシはノボザイム30%、アフィメトリクス19%、デュポン27%と、3社で8割弱を占めている。このように、どの作物でも数社が技術

第19回「身近になった」遺伝子操作②

GM作物の世界は、現在二つの波にさらされている。一つはGM作物栽培の本格化である。開発が盛んなインドは、栽培にも意欲的である。もう一つは遺伝子組み換え技術で市場のシェアを拡大してきたメジャーGM企業による中規模・小規模企業の買収である。そのため、メジャーはますます大きくなり、中小のGM企業は吸収され、存在感を失っている。

メジャーGM企業とどの作物でも数社が技術部という部署である。この

先になつて商品を選んでいる。また、努めて国産品を選んでいるという声も聞かれる。これらの傾向が生まれ

シエアは、アブラナ（ナタネ）を例にとると、モンサント25%、カーギル13%、デュポン12%と、4社で5割を有する。小麦はデュポン41%、モンサント27%と、2社で約7割。大豆はデュポン48%、モンサント28%で、2社で8割弱。ジャガイモはノボザイム1社で72%。トウモロコシはノボザイム30%、アフィメトリクス19%、デュポン27%と、3社で8割弱を占めている。このように、どの作物でも数社が技術部という部署である。この

一方で近年、スーパーや量販店の食料品売り場で、買い物客が「賞味期限」や「産地」を確認している姿をよく見られるようになった。同じ商品でも、賞味期限を見て、日付が

私たちが消費者が考えているような「安心」「安全」は、まだ保障されていない。多くの人はすべての食糧についてその原産地や加工地が分かるものだと考えがちであるが、これは勘違いにほかならない。幻想と言ってもよい。

【略歴】

1957年北海道美唄市生まれ。85年、務改革、講演を各地で行っている。主な執筆として「青果卸の業務改善」

卸売業者向けのコンサル

「青果卸の業務改善2」

「食糧操作」などがある。